
政吉とマサヨシ

都市耿介

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

政吉とマサヨシ

【Nコード】

N0538E

【作者名】

都市耿介

【あらすじ】

いつも毎日のように、クラスの同級生からいじめられている政吉。そんなある日、彼の前にもう1人の自分が現れた。8時間で完成しました。初めての作品です。

俺は、この毎日が嫌になる。

そんな感情を抱いている小崎政吉。彼は、今年で15になる中学生だ。彼は学力が低く、ルックスも普通だ。

だが彼はいじめられていた。毎日のように。

彼の同級生は、いじめを楽しんでいた。いじめればいじめるほど、それが快感だったのだ。

政吉に味方はいない。親や先生に相談しても相手にしてくれない。友達はいない。

持とうとも思わない。

一人で生きるしかない。だけど、周りは敵だらけ。そんな政吉であつたが、ある日、転機が訪れた。

その日は雨が降っていた。昼休みに政吉は、相談室に向かっていた。そこは職員室の隣にあつて、彼をいじめる同級生もあまり寄りつかない所だ。なので政吉は、そこで昼休みを過ごしていた。

だがこの日だけは違っていた。

中に隣のクラスの市川美恵がいたのだ。一瞬、戸惑つ政吉であつたが、彼女は優しく話しかけてくれた。

「何か用があるの？」

「あ、えーと……」

政吉は女の子と話すのが苦手であつた。それを見て彼女はこう言つた。

「あなたもいじめられているんでしょ？」

当てずっぽで言ったのだろうか。それとも知つてて言ったのか。

「じゃあ君も？」

美恵は頷いた。

「そうか……」

「お互いさまでしょ？」

まさか、彼女もいじめの被害者とは、思いもしなかった。

なぜなら、顔は童顔でスタイルがよく、長い髪型がきれいであったからだ。決していじめられているように見えなかったのだ。

そんな彼女が政吉に訪ねた。

「教室にいて楽しい？」

政吉は答える。

「いや、全然」

「じゃあ、何で教室にいるの？」

「それは……」

「誰か、好きな子でもいるの？」

それを聞いて政吉は笑い出した。久し振りに彼は笑っていた。彼女も笑う。

2人は笑い合った。

その時から、2人の間に絆が出来た。

2人は毎日のように、昼休みに相談室で会話を交わした。

それが二週間続いたある日。

「美恵が好きだ」

相談室の中で政吉は彼女に告白した。最初は振られると思っていたが、彼女は笑顔を浮かべた。

「ありがとうね」

そして美恵も政吉に告白した。2人は恋人関係となった。

2人は幸せであった。限られた時間と場所での付き合いであったが、2人にとって至福の一時だった。

しかし幸せな時間は長くは続かなかつた。2人にいじめの魔の手が襲いかかったのだ。

2人が付き合っていると、学校中でうわさになったのだ。それを確かめに来る生徒が現れたため、相談室でもいじめられるようになった。

そのため美恵は自宅に引きこもるようになった。連絡も取れなくなった。

その数日後、美恵は自殺した。自宅のトイレで首を吊っていた。政吉は悲しみに暮れていた。

彼女が死んでから5日が過ぎた。政吉のいじめはエスカレートしていくばかりだった。いつ自殺してもおかしくなかった。

この日もいじめを耐え、自宅に帰っていった。自宅のリビングに入ると、母が作った料理がラップに覆われている。彼の両親は共働きで、帰りが遅かった。彼はそのまま自分の部屋に入る。が、部屋の中の様子が違っていた。

それは中に男がいたからだ。男は政吉に背中を向け、床に座って漫画を読んでいた。

「お前、誰だよ！」

男は政吉の声を聞いて、立ち上がる。そしてゆっくりと政吉に振り向いた。

政吉は驚愕した。

「嘘だろ……」

何と男の顔が政吉と同じだったのだ。体型も。ただ違うのは、政吉が学校の制服に対し、男は全身黒ずくめであった。

「よう、政吉」

声まで同じだった。

「何者？」

政吉が訊く。男は答えた。

「俺はマサヨシだ」

マサヨシと名乗った男は不気味に笑みを浮かべた。政吉は動揺した。

「一体、どうなっているんだ？」

マサヨシが政吉を落ち着かせる。

「大丈夫だ。俺の話聞いてくれたら納得するはずだ」

政吉は言葉が出なかった。マサヨシの話は続いた。「まあいい。俺のもとの姿は、人間には見せられないからな」

政吉はマサヨシの言葉に疑問を感じた。

「つまり、お前は人間ではないのか？」

「ああ、そうさ。俺は人間ではない。俺の姿は、自由自在に変えることができるんだ。お前が来るまでは女の子の姿だったぜ」

「あのさ、訊くけど、お前はなぜここにいるんだ？」 マサヨシは思いもよらない答えを言った。

「今から、お前の願い事を叶えさせてやろう」

政吉はそこでも驚いた。「嬉しくないのか？」

「本当に願いが叶うのか？」

マサヨシは頷いた。

果たして、本当なのか？「騙されたと思って俺に言えよ」

なら、俺の願いは一つ。「俺の願いは」

「あ、待て。死んだ人間を甦らせるのは不可能だ」

「え」

美恵には会えない。ならば、敵討ちだ。

「じゃあ、俺と美恵をいじめた奴全員を殺して欲しい」

「やっぱりな。それでいいのか？」

政吉は頷いた。

「よし、わかった。明日になれば、そいつら全員死んでいるからな。じゃあ、またな！」

そこで目が覚めた。

夢か……。

政吉はパジャマから制服に着替えながらテレビをつける。

『昨夜、A県のC中学校に通う生徒たちが謎の死を遂げました』

「え」

「中学校は政吉が通っている学校だ。
あいつ、本当にやったのか。じゃあ、あれは夢ではない。
「やった」

彼は歡喜の声を上げる。「美恵、敵をとつたよ」
だが、突然彼の目の前が真つ暗になった。
何だ？

自分の部屋が真つ暗な空間に変わっていた。
一体、ここはどこなんだ？
すると政吉の前にマサヨシが現れた。

「どこなんだ？　ここは？」

「牢獄さ。お前の」

「牢獄だと？　何で？」

マサヨシは怒りを込めて言った。

「お前は、何人もの人間を殺すよう俺に要求した。よってお前は牢獄行きだ」

「お前一体何者なんだ？」　「俺は裁判官だ。お前の」　マサヨシは政吉に真実を告げる。

「俺の役目は、お前のような人間にテストをさせて裁きをすることだ。俺はお前と同じような人間を探し出し、なんでも願いが叶うことを話す。そして、それを聞いた奴がどんな反応を示すかを調査をしていた。今までの調査だと、つまらない願い事をした者が多かったが、お前のように誰かを殺して欲しいという人間もいた。俺はそんな奴を裁いているんだ」

政吉の頭の中は混乱していた。

マサヨシはさらに衝撃的な事実を言った。

「実はお前は死んでいるんだ」

「なんだと？」

マサヨシは政吉の周りをぐるぐると歩く。

「死んだのは、昨夜だ。死因は自殺。裁きの対象になった者は、ごく自然な死に方をする」

自殺なら、妥当ということなのか。

「それにお前をいじめた奴は死んではいない。さっきまでは全て幻覚だ」

俺は死んでいるのか。

「ああ、そうさ。お前は死んでいる」

政吉は心をよまれていた。

マサヨシは丁度政吉の前に止まった。そして、こう尋ねた。

「お前がなぜ、いじめを受けるのか考えたことがあるか？」

政吉は答えない。シヨックが大きく何も言えなかった。

「それはお前が人に対する思いやりがないからだ。ようは、お前は自己中なんだよ」

「！」

「お前は今まで人に優しくした事がないだろう？ お前は他人に対して冷たかったからな」

「そんな……。俺って、そんな人間なのか？」

「そうだ。お前は、そういう人間なんだ。だから、いじめられるんだよ、お前は」 そんな……。

政吉はその場に座り込んだ。

「お前は、人を死んで欲しいと思った。お前は、その時点で人に思いやりがないんだよ」

「いや、違う」

政吉は立ち上がった。

「俺は人に思いやりがある。俺は彼女を愛していた」「たった、1人だけな」

「……」

政吉はこれ以上何も言えなかった。

「さよなら」

そう言って、マサヨシは消えた。

政吉は空間の中に1人ぼっちになった。

寂しい。

政吉とマサヨシ

終
わ
り

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0538e/>

政吉とマサヨシ

2009年3月24日08時55分発行